

太陽の子

2025年 10月 No.193

秋 の 号

発 行

日立市助川町5-14-8

TEL(23)2620 FAX(33)9150

ホームページ <http://www.taiyonoie.com>

Eメール npo@taiyonoie.com

NPO法人 日立太陽の家

日立重症心身障害児(者)を守る会

日立太陽の家支える会



令和7年8月30日に開催されたピッピ・コンサートは40周年を記念したコンサートでした。たくさんの方が来場され、日立市長も舞台上で利用者さんやピッピスタッフと共にパフォーマンスを披露してくださいました。笑顔が絶えない素敵なコンサートになりました。

40周年記念ピッピコンサートを終えて

ピッピスタッフ 鈴木雅明

今年の8月30日(土)に行われた多賀市民会館大ホールでの40周年記念コンサートは大盛況で終わることができました。普段は日立市ひまわり学園管理者として働く身として、今回、太陽の家設立55周年事業としての位置づけで共催できたことをご支援ご協力いただいた関係各位の皆様により感謝申し上げます。ありがとうございました。

「スタッフは全員ボランティア」1985年に始まったピッピコンサートの紹介文句です。40年経た今も変わらずスタッフは全員ボランティアです。今回のコンサートでは18名の方から42編の詩をご応募いただきました。そのメッセージを届けるために日立市や常陸太田市、水戸市などから学生や社会人、退職された方までいろいろな方がスタッフとして活動しています。コンサート本番の当日スタッフ数を入れると約50名以上の方がコンサートの成功に向けて演者や裏方などボランティアスタッフとして関わってくださいました。

今回のコンサートでは、オープニングで浅川秀吾さん作詞の「ナベの中」を日立市の小川春樹市長にもご出演頂きご紹介させて頂きました。ナベの中にいろんな具が入っているから美味しいのと同じで、いろんな人がいるから楽しい社会なんだという作品のメッセージがあり、日立市で掲げている共生社会の実現という視点で重なり快くお引き受けいただきました。行政や地域が福祉という視点で一緒に暮らせる社会の実現も素敵ですね。

学生の頃から関わっている自分としては、障がいのあるなしに関わらずいろいろな方がコンサートの成功に向けて意見を出し合い、力を合わせて舞台を作り上げていく過程が好きで今もピッピの活動に関わっています。本当にピッピコンサートに関わって知り合った皆さんは私の財産だと思っています。いつでも誰でも参加できるのがピッピです。「スタッフは全員ボランティア」あなたも一緒にピッピコンサートにスタッフとして関わってみませんか？

職員リレー

太陽の家

五十五年のあゆみ

日立市太陽の家 管理者

菊地 祐二

昭和四十五年当時、障害者に対する偏見や差別に障害者やその家族は、世間の目を気にしながら生活せざるを得ないという時代背景の中、我が子を隠さずおんも（外）に出そうと親達と共に市民や行政が立ち上がり、昭和四十五年七月、重症心身障害児（者）保育通園施設「日立市太陽の家」が開園しました。

どんなに重い障害があっても家族と共に過ごしたい、住み慣れた地域で安心して自分らしく生活したい。障害者やその家族の願いに寄り添いその実現のために、五十五年歩み続けてきました。

その間、社会情勢も変化し、行政がサービス内容を決めていた措置制度から、障害者当事者の自己決定を尊重する利用契約制度へ移行、法改正により支援費制度から障害者自立支援法、そして障害者総合支援法に変わり、太陽の家はその時代の流れに沿い、平成十八年日立市から指定管理者となり、平成二十年に特定非営利活動法人格を取得

し、自己実現の大切さ、その人らしい心豊かな人生、理想の暮らしを支援する様々な要望に応えるべく、居宅介護事業所、共同生活援助施設風の家、相談支援事業所を開設しました。

それにより、日常生活や余暇活動等の支援、入浴介助、家事援助、通院等介助、親子共にリフレッシュできる場所、緊急時一時保護、生活に関わる相談や助言、一人ひとりに合わせたケアプランの作成、様々な専門機関との連携、情報の提供・助言等の支援が円滑にできるようになりました。

また、太陽の家内には日立市中心身障害者歯科診療所が併設され、専門の歯科医と大学病院から派遣された歯科医による歯科治療を受診できるようになりました。

平成二十六年に、日立市ひまわり学園、日立市しいの木学園、平成三十一年には日立市母子療育ホームの指定管理者になり、その同じ年、各施設の老朽化と、障害者とその家族の地域生活を支える拠点として、五施設を一つの建物に集約し、複合施設「日立市鳩ヶ丘障害者福祉施設」に引っ越し、新施設で、幼児から大人まで切れ目のない支援ができるようになりました。

令和二年には日立市障害者共同生活援助施設が開設。指定管

理者になり、体験型宿泊を利用することで、地域のグループホーム等への入所がスムーズにいくよう期待されています。

支援員は、日頃の関わりの中で、沢山の笑顔とありがたうに出会えます。懸命に生きる姿に、強さや元気を沢山もらえます。

そして命の尊さを学びます。生まれてきて良かった、幸せと思える人生を、たとえ障害があろうが無かろうが、人はいろいろな人の支えがあつて、時には助けがあつて生きているのだと実感しています。障害を取り除くことはできなくても、合理的配慮により社会的バリアを取り除くことはできます。

太陽の家の理念です。

ここは書物にないものを学ぶところである。

どんなに障害が重くとも、一人の人間として

その生命は尊重されなければ

ならない。

障害のある人たちを囲んで

幸せな社会の建設を目指す

日立市民の心の象徴として

日立市太陽の家は生まれた。

この家は全ての障害児（者）

を守りその行為を通して

市民一人一人が生命の尊さを

考える場としたい。

出会いを大切に

多目的喫茶 鈴木 直子

八月から喫茶室で働かせていただいています。働くきっかけとなったのは、ピッピコンサートスタッフとなったことからのご縁です。四十年前、学生だった時にピッピコンサートのお手伝いをしていたこともあり、今回の四十周年記念コンサートにぜひ協力させてほしいと思い、仲間に入れていただいたことで、たくさんのお会いに恵まれました。

そして、スタッフの集まりにも使用していた喫茶室——Oscar's Coffee——の成り立ちやビジョンに惹かれ、働かせていただくことにしました。

現在、常陸太田市に居住していますが、日立は私の生まれ育った故郷です。喫茶室に入ると、「おかえり」と言ってもらえるようでホッとします。ここに立ち寄る方々にも、暖かな気持ちと安らぎを感じていただけたらという笑顔で接していきたいと思っています。これからも出会いを大切に「二期一会」の心をもって、つとめていきたいなと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

日立鉱山のトロツコが

走っていた頃

多目的喫茶 蘭部 典子

ピッピコンサートボランティア活動のご縁でお世話になりました蘭部と申します。

簡単な自己紹介をさせていただきます。私は日立で生まれ育った生粋の日立っ子団塊ジュニア世代です。昔、日立鉱山が栄えていた頃、日立の銀座通りと呼ばれていた本山に結婚前まで住んでいました。山のふもとの「みそ饅頭屋」さんを祖父母と母が営んでおりました。

周りは山に囲まれた辺鄙な場所です。お饅頭屋さんは、じいちゃん手作りの家で、トイレはポットン便所、お風呂は薪で焚く五右衛門風呂、水道は山頂からの湧き水をホースで引き込んでいました。くわえて、番犬用の犬3匹、ニワトリ、鯉、アヒル、シャモなどを飼っており、毎日がサバイバル生活です。

本山の生活ぶりの話は、私の面白い持ちネタとして数え切れないほど持ちあわせています。ぜひ、喫茶室に来てお話だけでも聞きにきてください。どうぞよろしくお願いたします。

笑顔と感謝

古老つれづれの記

保護者 佐藤 芳昭

「継続は力なり」とは昔から言われている事ですが、それにプラス根性と執念があろうかと思うのです。今回のピッピコンサートも然り、会を継続させることも又然りで、その中では、色々な葛藤と闘いながらピッピと言う「灯」を消さずに、守る会と言う「灯」を燃やし続けて行く事に、非常に大きな意義があると思うのです。特にピッピの場合全てボランティア活動の一つとしての行事であり義務付けられているのではなし、行事費が予算化されてもおらず、この様なケースの事業を形にすることこそ大変な意志の強さが必要でピッピスタッフ一同に多大の敬意を送らなければなりません。

設のご配慮もあり参加させて貰うことが出来まして施設にも感謝しております。瑞昭は太陽の家が大好きで、Web面会の際太陽の家の話を少しでもすると笑顔になる位太陽の家が本当に好きな子なのです。ですから十年ぶりに太陽の家の皆さんとお会いするのとが出来、そしてピッピコンサートのお囲気を肌で感じ、拍手をするやら手拍子で調子をとる仕草をするなど、久しぶりに彼の喜ぶ姿を目の当たりに見て胸に迫るものを感じ、施設から連れてきていただきました。そしてピッピのスタッフ一同にも感謝しています。

身近な例の一つに「重症心身障害児（者）を守る会」がありますが、この会も先人達が自発的に会の必要性を感じ仲間達を勧誘し色々な努力があつたからこそ今の守る会が連綿と続いているのです。しかし、今の守る会の活動を見ると何となく会に活性化や活力が薄らいでいる様な感さえるのです。

この現象は全国的なものの様ですが、何故その様な現象になっているのでしょうか。色々な理由がある中で大きな一つの理由は会員の高齢化が挙げられると思います。もう一つは各種情報がパソコンやスマホから自由に把握出来、会や人を介さずに我が手に簡単に入る事です。何人かの仲間情報と交換し合えば済むことで会に入って対人関係やらその他の事で煩わしさを感ぜたくないという、その様な気持ちで今の若い人達は持っている様な感がするのです。他方、障害者を持った事のない方や、過去持っておられた方等のご支援は今でも続いており誠に有難く感謝の気持ちでいっぱいです。その様な方々に対しては会の「灯」を燃やし続ける事が重要なのであろうと思うのです。勿論障害を持っている子供達がこの世に存在する限りは。

私もこの守る会活動に関わりを持ってから五十有余年となり我が身を振り返って見た時ピッピスタッフの様に会のために夢中になって活動をしてきただろうか。何かもつと夢中になって死ぬ気でやるべき事があつたのではなかったか等々、今でも反省の心境です。

「優しさ」の発着点

櫻井 敏幸

最後にピッピコンサートは日立市に障害者が存在する限り大変でしょうが「ピッピの灯」を消さないで欲しいと思うのは私だけであろうか、そうではないと思っております。資金面が大変であればクラウドファンディングのやり方もあります。兎に角、先人の点けた「灯」を燃やし続ける様、夫々の場所で頑張りますように。

この度は「太陽の家」創立五十五周年おめでとうございませう。昭和四十五年七月生まれのボクと「太陽の家」とは「同期の桜（井）」です。よ。さらに、第十六回ピッピコンサートにおいて入選五作品の一つに選んでいただけてとても幸運だったと思っております。ありがとうございます。

入選した拙詩、「優しさ連鎖」は（ゆうあい）での創作活動の中で作った詩です。（ゆうあい）は日立市からの委託で日立市社会福祉協議会が行っている地域活動支援センター事業のことです。（ゆうあい）には利用する曜日によって絵画、刺しゅう、編み物、音楽、フラワーアレンジメント等の創作活動をする時間（講座）があつてそれぞれに専門的な知識、技術を持っている方（講師の先生）が月に二度お見えになってボク達の指導に当たってくださっています。ボクは絵画と音楽の講座を受講中です。

「優しさ連鎖」は、（ゆうあい）の音楽講座で二〇一七年に作った詩です。

詩を作ったきっかけは同年五月に当時（ゆうあい）音楽（次頁へ）



今夜は彩りハンバーグ！愛情たっぷり笑顔満開、美味しくいただきました。（グループホーム）



満開に咲いたいろんな種類のひまわりの花。みんなの笑顔も負けないくらい輝いています。（ひまわり学園）



園外活動で、プラネタリウムに行きました。みんなで楽しい夏の思い出を作りました。（母子療育ホーム）



グループ活動、療育の中で多肉植物の寄せ植えをしました。鉢から手作り、それぞれの個性を活かした作品ができました。（太陽の家）

※写真撮影のためマスクをはずしていません

（前頁より）
講座の講師をしてくださったって、いた村上邦子先生が先生の音楽仲間と先生の地元の東海村で「にじいろコンサート」という音楽イベントを催すというので見学に行ったことです。
「優しさ」をテーマに掲げ、にじいろコンサートは素敵なコンサートでした。コンサートから帰宅したボクは次の音楽の講座の日までに「優しさ」をテーマにした詩を作り曲も作りました。その時の詩が今回のピッピコンサートに入选した「優しさ連鎖」です。
「小さな生き物をより大きな生き物が食べそれをさらに大きな生き物が食べるという関係が繋がっていく食物連鎖のように優しさも連鎖していくんじゃないか」という発想を膨らませて作った詩です。「情けは人の為ならず」という言葉があります。が、優しさも誰かのためではなく巡り巡るものだと考えます。五十五年という長きにわたって優しさを発し続けてきた「太陽の家」は何周か回ってきた優しさに満ちた所だと思えます。これからも優しさを発し続けてください。

お知らせ

◎二〇二五年度

NPO法人日立太陽の家

利用者総数 三百八十五名

男性 二百十六名

女性 百六十九名

ご寄付ありがとうございました

○次の方から寄付を頂きました（敬称略） 六月～八月

黒澤弘明 金澤博美

木村順子 前田勝子

とく名

日立太陽の家支える会

○次の方から物品の寄贈がありました（敬称略） 六月～八月

椎名将光

有馬こう

黒澤和子

編集後記

ピッピ・コンサートに参加。懐かしい人達との再会であの頃のことを思い出す。いつものみんなも集まって笑顔で挨拶をかわす。嬉しい、楽しい時間を満喫しました。

一人ひとりの優しい気持ちが集まって作られていくピッピ・コンサート、次回はいつになるのか、わくわくしながら待ちましよう。（K記）